《論　文》

“口”、“嘴”の基本義とその意味拡張[1]
A Study of the Basic Meaning and Sematic Extension of Chinese “Kou” and “Zui”

日下部　直美
Naomi KUSAKABE

Abstract

This paper uses concepts such as “metaphor” and “metonymy” from the perspective of cognitive linguistics to discuss the semantic expansion of the noun “mouth” in modern Chinese, and analyzes its cognitive mechanism. The paper discusses Metonymic and metaphorical extensions, where the semantic extension is based on the image schema of a “container”. The body part noun “mouth” is extended metonymically from its basic meaning, and metaphorically from the image schema of “container” in regards to “open/close”, “eating behavior”, “verbal behavior”, “verbal expression”, and “object part”. These semantic extensions are also relevant when “mouth” is used as both a nominal classifier and a verbal classifier. When used as a nominal classifier, differences from other body part nouns used as classifiers, are also noted.

キーワード：身体部位名詞、メタファー、メトニミー、意味拡張

Ⅰ．はじめに

本稿では、日下部 2005、日下部 2020、同 2021、同 2022 と同様に、認知意味論の「メタファー」（隠喩）、「メトニミー」（換喩）の概念を用いて、身体部位名詞である“口”、“嘴”が基本義から様々な意味へとどのように拡張しているかについて分析を行う。

日下部 2005 では「頭」を意味する“头”、日下部 2020 では「手」を表す“手”、同 2021 においては「足」を表す“足”、“脚”、“腿”、同 2022 では「目」を表す“眼”、“眼睛”、“目”について考察を行った。本稿においても、上記と同様の手法を用いて身体部位名詞である“口”、“嘴”について考察を行う。

本稿で用いるメタファー、メトニミーの概念については、籾山 2002：65、76 の次の定義に従う[2]。

メタファー――二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミー――二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

“口”、“嘴”はともに〈身体部位〉を表す「口」という意味から異なる意味へと拡張している。本稿では基本義である「口」の意味から様々な意味へと拡張している認知メカニズ

ムについて明らかにする。

Ⅱ．“口”、“嘴”の基本義

〈身体部位〉である「口」を表す語としては、“口”、“嘴”が挙げられる[3]。このうち、“嘴”は“一张嘴”ということはできるが、“口”は“*一张口”というように、量詞を用いて表すことはできず、“开口”（口を開く）や“插口”（口をはさむ）といったフレーズや、“口头禅”（口癖）や“口耳相传”（口から耳へ伝える）などの慣用句や成語の場合に用いられる[4]。

以下に、身体部位の〈口〉として用いられていると考えられる“口”、“嘴”の例を挙げる[5]。

（1）厨师万分珍惜地用刀切下一片，蘸了些酱汁放进我口里。嚼咬起来又嫩又柔，好像在吃日本刺身。
［料理人は極めて丁重に切り落とし、味噌に浸けてから私の口の中に入れた。噛むととろりとして柔らかく、まるで日本の刺身を食べているようだった］

（2）在敌人疯狂搜捕中，村医用大烟水做漱口消毒液，用嘴把伤口里的脓血和碎骨一口一口吸出，经过近三个月的治疗，张秀山奇迹般地保住了生命。
［敵が狂ったように捜索している最中に、村の医者はアヘン水でうがい消毒液を作り、口で傷口の血膿と砕けた骨を一口ずつ吸い出した。3ヶ月近くの治療を経て、張秀山は奇跡的に命を取りとめた］[6]

次に、この基本義から拡張したと考えられる意味について考察していく。

Ⅲ．“口”、“嘴”のメトニミー的拡張

「歯」は「口」の一部であるから、“口”を用いて〈歯〉を意味し、ウマやロバの年齢を表すときに“口”を用いることがある[7]。これは、ウマやロバの年齢を見分ける時に、歯の数を数えることによる[8]。

（3）早年耿驴子也是扒开牲畜的嘴查看口齿。口齿都有规律。　　霍竹山《铁码子》
（http://www.xinjiangwenyi.cn/wlkw/xb/202102/t20210220_533856.html）[9]
［若い頃に耿驢子は家畜の口を開き歯の検査をしていた。歯には法則があるのだ］

さらに、この〈歯〉との関連性により、名量詞として用いられる場合もある。

（4）或者每年请牙医诊察一次，改正龃龉处（这种龃龉，隐约得连自己也不觉察，所以需要牙医诊察）。我因为不知道，就白白牺牲了一口牙齿。
［あるいは毎年歯医者に診察に行き、噛み合わせのずれ（このずれは自分でもはっきりと自覚していないため、歯科医に診てもらう）を矯正したりする。私も知らなかったので、歯を一本無駄に犠牲にしてしまった］

（5）……，即春秋战国之交，而不是过去认为的战国中、晚期。经取样分析，这口剑所用的钢是含碳量百分之零点五左右的中碳钢；……。
［……，即ち春秋戦国時代の過渡期であり、以前に考えられていた戦国時代中期、後期ではなかった。この剣に使用されていた鋼には炭素含有量が 0.5%前後の中炭素鋼が含まれていた……］

上の（4）のように、「歯」を数える際に“口”を用いる場合もあれば、（5）のように、「歯」の形状または機能に類似したもの、つまり「刃」を数えるときにも用いる。この場合、身体部位の「口」の一部である「歯」の意味からの拡張であるため、メトニミーとメタファーが相互に関連していると考えられる。
また、“口”は「豚」を数えるときに用いる。

（6）农庄的畜牧场里现有八十二头牛、十二匹马、七十口猪和二百八十只鸭子。另外还有三垧果木园子，这些方面每年使农庄增加了五亿元的收入。
［農場の畜産場には現在 82 頭の牛、12 頭の馬、70 匹の豚と 280 匹のアヒルがいる。さらに他には 3 垧の果樹園があり、これらより農場の収入が毎年 5 億円増加している］

これは、「豚」の「口」に着目した場合である。この場合も、身体の一部である「口」を用いて、「豚」を数える量詞に当てているため、メトニミー的拡張ということができる [10]。

Ⅳ．“口”、“嘴”のメタファー的拡張

山梨 2000：144 によると、【容器】のイメージスキーマの複合的な視点について以下のように記述している [11]。

一般に、容器のスキーマを問題にする場合には、限定された空間領域への出入りが問題にされる。……（中略）状況によっては、この空間領域の内（ないしは外）に何が存在するのか、その存在が出入りのモードにどのようにかかわっているのか、この内と外の境界領域のどちらに焦点が当てられているのか、この空間の境界領域を内から見ているのか外から見ているのか、といった複合的な視点が、言葉の意味の拡張に際し重要な役割をになう。

本節では、身体部位である「口」を、ある限定された空間領域をもつ【容器】として捉え、この視点に基づいて中国語における“口”、“嘴”の意味拡張について論じていくことにする。

(1) 〈開閉〉に基づいた拡張

山梨 2000：145 によると、【容器】のイメージスキーマを、「容器に見たてられた存在が、閉ざされた空間から外に向かって開かれている」という視点から見ることができる。つまり、【容器】のスキーマとして、空間領域の【開閉】という概念を見出すことができる。

身体部位の「口」も、【容器】のスキーマに基づいて捉えることにより、〈口の開閉〉に基づいた表現を挙げることができる。

（7）……我们等他唱完，请他说说歌的内容，他摊开双手，张开嘴笑了：“我的法语是刚学的，翻译不出来。我介绍其中的一节吧。”
［……我々は彼が歌い終わるのを待って、歌の内容を教えてもらった。彼は両手を伸ばして口を開けて笑い、「私のフランス語は勉強したばかりで、翻訳できません。その中の一節をご紹介しましょう」と言った］

（8）战士脸上露出了笑容，他从口袋里摸出那块高粱饼子咬了一口，看他吃得那么香甜，好像是从没吃过那么好的东西似的。
［兵士は顔に笑顔を浮かべて、ポケットからコーリャン餅を取り出して一口齧った。美味しそうに食べている様子は、まるでこんな美味しいものは食べたことがないようであった］

上の例（8）の“咬”は、「（口で）噛む」という意味であるが、実際は「（口に接している）歯で噛む」ことである。これは前述した「歯」を表す、全体で部分を表すメトニミー的拡張と関連があるといえる。また、【容器】のスキーマとの関連として、〈口の開閉〉との関連性も見出せることから、メタファーとメトニミーの両方が関連しているといえる。

また、所謂動量詞で用いられる場合がある。

（9）老人接过茶杯抿了一口 ，品了一品说：“嗯，的确是今年的新茶。”
［老人は茶碗を受け取ると一口すすり、味わいながら「うん、確かに今年の新茶だ」といった］

（10）第三次试举还是 155 公斤。他深吸了一口气，紧紧地抓住杠铃，大吼一声，终于把杠铃举起。
［第 3 回目の試技も 155 キロであった。彼は深く息を吸い、しっかりとバーベルをつかんだ。大声で吼えると、ついにバーベルを持ち上げた］

（11）当时天气很冷，小廖却二话没说，喝了几口酒，把衣服一脱，一次次潜入水下，终于割断了缆绳。
［当時は寒かったが、廖さんは何も言わずに酒を何口か飲むと服を脱いだ。何度も水中に潜り、やっと係船ロープを切断した］

この場合の“口”は、〈口の開閉〉を表すのみでなく、「口」を【容器】として捉え、さらに【起点－経路－到達点（着点）】のスキーマとして【移動】の概念で捉えることができる。これは、「口」は食物の出入りを表す器官であることからも容易に推測できる。

(2)〈摂食行動〉に基づいた拡張

「口」は、食物の摂取を行う機能・役割をもつ器官である。「食物を摂取する」ということは、人間が生きていく上で必要不可欠であることから、「口」で「人」表す場合がある。また、この場合、個人としての人間ではなく、「家族」という集団における「人」を表す。

従って、「摂食行動」と「家族」は、「口」を仲介して、人間にとって互いに密接な繋がりがあるものであるといえる。また、「口」を【容器】のスキーマに基づいて考えると、【容器】のスキーマは【起点－経路－到達点（着点）】のスキーマとして捉えることができ、これは【移動】と関連性があるといえる[12,13]。これは、日常生活の経験においても、「口」を介して食物が出入りすることから、容易に推測できる。

このことを裏付けることとして、“口”を用いた表現は〈「家族」と関連した人〉といった意味を表す。

（12）买房时贷了 1.8 万元，要求每月还贷 749 元，我们两口子双职工收入水平中等，今年夏天就还清了所有贷款。
［家を購入した際は 1.8 万元のローンを組み、毎月 749 元の返済が必要であった。我々夫婦は共働きで中程度の収入があったので、今年の夏でローンを全て完済した］

（13）目前全国究竟有多少农民？国家统计局人口司的最新分析资料认为，以往所指的“9 亿农民”是“农业户口”的人数。
［現在、全国には一体農民がどれだけいるのであろうか？国家統計局の人口局による最新の分析資料では、以前に指摘した「9 億」は「農村戸籍」の人数であると考えられている］

この場合、「口」という身体部位が、【容器】として「摂食行動」を行う「際立った」部分であるため、その身体を支配する〈人〉を表している「全体－部分」のメトニミー的拡張が背景として捉えられている。

また、“口”は、〈家族としての人〉を数える際の名量詞として用いられる場合がある[14]。

（14）“您身体还好吧？生活上有什么困难吗？”“您家里几口人啊？收入来源靠什么啊？”
［「お元気ですか？生活面で何か困ったことはありますか？」「何人家族ですか？収入源は何ですか？」］

これは、〈身体部位〉である「口」を顕著な部分と見なしていることから、上と同様に「全体－部分」メトニミーによる拡張とも関連していると論じることができる。即ち、「家族」を「食い扶持」として見なしていると考えられる。

また、食物を摂取する際に必ず知覚する〈味〉についても、“口”を用いて表すことができる。

（15）我国北方人“口重”，高血压的发病率就高于“口轻”的广东省。为了控制高血压的流行，许多国家都提倡吃少盐膳食，世界卫生组织建议每日食盐用量不超过 6 克。
［我が国の北方人は「塩辛い味付け」であり、高血圧の発病率が「薄味」の広東省より高くなっている。高血圧の流行を抑制するために、多くの国では減塩食を提唱しており、世界保健機関は毎日の食塩量が 6 グラムを超えないように提案している］

「食物」は「口」とは別の領域であるが、〈口を介して摂取するモノ〉として、「口」が焦

点になる。そして、「食物」を摂取すると、「味」を知覚することから、「口」、「食物」、「味」は一連の繋がりがあると推測できる。「口」は、「食物」を摂取することのできる器官であり、その食物の付属物である、「味」を知覚することができると考えられる。つまり、「口」は「味覚」をその機能のなかに含んでいることから、〈口〉を参照点として、活性化領域のなかに含まれる〈味覚〉をプロファイルしたと考えられる。

(3)〈言語行動〉への拡張

また、単に「口」の〈開閉〉を意味するだけではなく、そこから〈言語行動〉へと拡張された意味もある。

（16）可是，当她问郭大娘需要什么东西时，郭大娘却不好意思开口 。经过再三劝说，郭大娘才说……

［しかし、彼女が郭おばさんに何が必要かと尋ねた時、郭おばさんは口に出すのが恥ずかしかった……］

（17）金钱买来的婚姻，哪有什么幸福可言！夫妻间常常发生打架、吵嘴、离婚的事。

［金で買った結婚の、どこに幸せというものがあるのか！夫婦の間にはいつも喧嘩、言い争い、離婚といったことが発生している］

この場合、「口」の〈開閉〉を言葉を発する行為として捉えている。

田中 2002：7 は、日本語の「口をひらく・口をとざす・口をふさぐ（封じる）」という慣用表現の意味について、「この慣用表現の意味は、〈口の開閉〉を参照点として、それを含む〈言語行動〉という出来事にアクセスし概念化するメトニミーとして生じている」と述べている。日本語と同様に、中国語においても、〈口の開閉〉と〈言語行動〉をメトニミーとして分析できる。

したがって、身体部位としての〈口〉という概念から〈言語行動〉という概念という別の概念領域への拡張であるため、メタファーとメトニミーの両方が関わっている拡張である。「口」は、「言葉」を発する器官であるため、“口”、“嘴”で〈言葉を発する行為〉すなわち〈言語行動〉そのものを表す場合がある。これは、上に挙げた例から、さらにメトニミー的拡張を行い、その行為そのものを指すようになっているものと考えられる。

（18）然而，妈妈却不高兴地责怪孩子多嘴了。父母亲的粗暴的禁止，往往把孩子们创造精神挫伤了。

［ところが、母親は不機嫌に子どものお喋りを咎めてしまう。両親の荒っぽい抑制は、しばしば子どもの創造する心の邪魔をしてしまうのだ］

（19）于战争而言，如果你在那种情况下也会像我一样去做，那就是学会用一张硬嘴逃避。

［戦争になった場合、もしあなたがそのような状況でも私と同じようにするのであれば、強硬に言い張って逃げ出すことを会得するでしょう］

この場合も、「口」を〈開閉〉することで、「言葉」が発せられ、〈言語行動〉を行うことができる。よって、【容器】のスキーマからの拡張である〈口の開閉〉の概念で捉えることが

できる。

(4)〈言語表現〉への拡張

さらに、〈言語行動〉の産物として、「口」を意味する“口”、“嘴”で、〈言語表現〉を表す場合もある。

（20）以“工作太忙没时间运动”为逃避健身的最好借口,尽管他们知道自己处于亚健康状态,但是由于工作、生活习惯等,还是将大部分时间花在应酬和娱乐上而无暇锻炼。
［「仕事が忙しすぎて運動をする時間がない」というのをトレーニングから逃げる最も良い口実にして、彼らは自分が亜健康という状態にいることを知っているにも関わらず、仕事や生活習慣などによって大部分の時間を接待や娯楽に費やし、運動をする暇がない］

（21）现在的营业员，心好了，嘴甜了，话多了，腿勤了。这里有两个重要原因：一是营业员没有“铁饭碗”，严重失职失责，根据社员意见，大队有权撤换；……。
［今の販売員は心根がよくて口がうまく、言葉数も多くて足まめである。ここには2つの重大な理由がある。一つは販売員には「安定した収入源」はなく、職務と責任において深刻な過失があると、社員の意見に基づいて大隊は更迭する権利をもっている……］

〈言語行動〉と〈言語表現〉の関連性について、田中 2002：14 は以下のように述べている。

言語行動という日常的に反復される基本的な出来事については、この出来事全体が一つのゲシュタルトとして理解され、経験から得られたこの出来事に関する知識が一つの構造化されたフレームを形成すると考えられる。……（中略）【言語行動フレーム】を背景として、概念〈口〉は、〈身体〉概念、〈言語行動〉という概念、またその産物である〈言語表現〉という概念と密接に結びついており、〈口〉が活性化されるとき、〈身体〉、〈言語行動〉、〈言語表現〉は容易に活性化される。

このことから、中国語における「口」を表す“口”、“嘴”も同様に、〈身体部位〉としての〈口〉、〈言語行動〉、及び〈言語表現〉へと拡張していると考えられる。

“口”は、また、〈話す言葉〉を数える際に、量詞として用いられる場合がある[15]。

（22）在接受本报独家专访时，他说着一口带日本腔的英语，向记者反复强调：“亚洲科学家应该更紧密地合作，为了我们的子孙后代。”
［本紙の独占インタビューを受けてもらった際に、彼は日本なまりの英語を話し、記者に「アジアの科学者はさらに密接に連携すべきだ。我々の子々孫々のためだよ」と繰り返し強く指摘した］

この場合数詞は“一”に限られるが、これは、「言葉」というものが抽象物であるためと思われる。

（5）〈物体部分〉への拡張

「口」を表す語で、物体部分へとメタファー的拡張をしている意味として考えられるものがある[16]。

（23）女儿 5 个月大的时候，开始喂她瓶装果汁，有一天偶然发现，亨氏果汁瓶的瓶口与标准奶瓶的瓶口一般大小，可以直接接上奶嘴，小婴儿喝果汁时用起来特别方便。

［娘が 5 ヶ月の時に、ジュースを哺乳瓶に入れて飲ませ始めた。ある日偶然、ハインツのジュースの瓶の口と標準的な哺乳瓶の口が同じ大きさであり、直接哺乳瓶の吸い口に取り付けて赤ちゃんがジュースを飲むときに使うととても便利だということに気づいた］

（24）有客人光顾时，但见他把身体向前一弯，凉茶便从葫芦形的茶壶嘴倒出，正正落在手上的杯里，分毫不差，……。

［客が来店した時には、彼は体を前に曲げただけで、冷たいお茶がひょうたん型の急須のつぎ口から注がれ、真っすぐに手にした茶碗に落ちて寸分も違わなかった……］

（23）、（24）は、「口」は食物が出入りする器官であることから、【容器】のスキーマと関連性のある【移動】の概念に基づいた拡張であるとも考えられる。

さらに例を挙げる。

（25）父亲睡在眠床外侧，床头凳子上有一个瓷杯，水中浸着他的假牙。瓷杯旁边，放着香烟、火柴和烟缸，还有象牙烟嘴。

［父は寝台の外側に寝ていて、枕元の椅子には磁器の茶碗を置き、入れ歯を水に浸していた。磁器の茶碗の横には、タバコ、マッチ、それから象牙のシガーホルダーが置かれていた］

（26）10 月 2 日上午 10 点左右，我不小心撞碎了书柜的玻璃，左手被划伤，大拇指伤口 3 厘米长，无名指 1 厘米长，鲜血直流。

［10 月 2 日午前 10 時頃、私はうっかり棚のガラスにぶつかり、左手に裂傷を負った。親指の切り傷は 3 センチ、薬指は 1 センチで、鮮血がどっと流れた］

この場合も【容器】のスキーマで捉えることができ、また、【起点－経路－到達点（着点）】のスキーマと捉えることも可能であるため、ここから【移動】の概念を導き出すこともできる。身体部位である「口」の特徴として、「開閉」し、「食物」や「言葉」が出入りすることが挙げられる。よって、上の例は、この特徴に基づいた物体部分への拡張であると捉えることができる。

【容器】のスキーマとして考えられる場合の名量詞としての用法は、「井戸」や「かめ」を数える場合である。

（27）大岭脚村原来挖了三口井，没有水，经过检查后又继续挖，现在三口井都挖出水来

了。

［大嶺の麓の村にはもともと井戸が 3 本掘られていたが、水が無かったため検査後も掘り続けていた。今は 3 本とも水が出るようになった］

（28）二十年的缸醋，舀起来明显更加黏稠。最里面的几口缸上面贴着“30 年”的字样。

［二十年物の甕の酢は、すくってみると明らかに更に粘り気が強い。最も奥のいくつかの甕には「30 年」の文字が貼ってある］

この場合も【容器】とみなし、モノを出し入れすることができるため、【起点－経路－到達点（着点】のスキーマとして【移動】の概念で捉えることができる。このように捉えることにより、「井戸」、「かめ」、「箱」を数える量詞として“口”を用いているのである。

Ⅴ．名量詞として用いられる“口”と他の身体部位との着眼点の違いについて

同一の事物を数える際に、“口”を名量詞として用いる場合と、別の身体部位を借用した名量詞を用いる場合がある。ここでは、その着眼点の違いについて考察していきたい。

（1）“一口猪”と“一头猪”の着眼点の違いについて

“猪”を数える場合、量詞として“头”または“口”が用いられる。ここでは、その用いられる場合の着眼点の違いについて論じていきたい。

“头”の場合は、比較的身体が大きい動物に対して用いる。“猪”も、“牛、羊、象…”等と同様に、身体が大きいと思われる動物の中に含めることができる[17]。しかし、“口”は“猪”の量詞として、“头”と同様に扱うことはできない。以下にその表現例を挙げる。

（29）那儿的动物园有三头猪。

［あそこの動物園には豚が 3 匹いる］

（30）*那儿的动物园有三口猪。

上の例で、“口”を用いることができない理由として、以下のことが考えられる。これは、上で分析してきた〈摂食行動〉の概念に基づいた拡張と関連していると考えられ、、〈家族〉としての〈人〉の他に「家畜」も含むことができる。すなわち、「家畜」としての「豚」は“口”を用いることができるが、「家畜」ではない「動物園」にいる「豚」には用いることができないのである。また、北方出身のインフォーマントによっては、“猪”を数える場合、“口”を用いない人もいる。したがって、「家畜」としての「豚」も、次の（31）のように“头”を用いる。

（31）不少人家养着好几头猪、10 来只鸡，大多数村民家里的粮仓装得满满的，……

［多くの人は何匹もの豚と、鶏を 10 羽前後飼っており、ほとんどの村人の穀物庫は一杯に詰まっていた……］

“口”を用いない理由として、北方出身のインフォーマントは次のように述べている。人間である家族を数える場合にも“口”を用いることから、「豚」を“口”で数えるときに

人間を連想してしまうため、用いないとのことである。つまり、「豚」は動物であって、人間とは違うという区別をすることから、量詞として“口”を“猪”には用いないのがその理由である。

(2) “一口井”と“一眼井”の着眼点の違いについて

ここで、先に分析した量詞として用いられる“口”と“眼”の相違点について見ていくことにする。

“口”と“眼”は「井戸」を数える場合に用いられる。したがって、以下のようにいうことができる。

(32) 我们村子里有一口井。
［我々の村には井戸が一本ある］
(33) 我们村子里有一眼井。
［同上］

この場合の“口”と“眼”は“自由义”であり、数詞に制限はなく、次のようにいうことができる[18]。

(34) 我们村子里有{两/三/十}口井。
［我々の村には井戸が{二/三/十}本ある］
(35) 我们村子里有{两/三/十}眼井。
［同上］

何杰 2001：261 は、“井”に用いられる“口”と“眼”の着眼点の違いとして、以下のように指摘している。

> “眼”、“口”的理据都具描绘性和比喻性，也都可以用于井，但理据的重点选择不同。“眼”的理据重点在于强调描绘“井”的深洞状；“口”的理据重点在于描绘井面像“口”的状态。
> ［“眼”と“口”の根拠については、両者は描写生と比喩性を有しており、ともに井戸に用いることができる。ただし、根拠となる焦点の選択が異なっている。“眼”の根拠となる焦点は、「井戸」の深い穴の形状の描写を主張しており、“口”の根拠となる焦点は井戸の「口」のような形状を描写しているという点にある］

そこで、“眼”が「深さ」に着目した場合を考えてみると、次のようにいうことができる。

(36) 我们村子里有一眼十米深的井。
［我々の村には 10 メートルの深さの井戸が一本ある］

上のように、“眼”が「深さ」に着目していると考えられるが、何杰 2001 が言うように、「深さ」だけに着目しているとは限らない。以下の例はインフォーマントの間で意見が分かれる。

（37）?我们村子里有一眼十米宽的井。
［我々の村には 10 メートルの幅の井戸が一本ある］

この文を許容できない理由として、“眼”と“寛”が共起することに問題があると指摘された。つまり、“眼”の場合は、〈狭い〉という概念が含まれているため、その概念に反する「幅が広い」という意味の形容詞である“寛”で修飾することができないと解釈できる。このことにより、日下部 2022 で考察した〈入口が比較的狭く、奥行きがあるモノ〉というスキーマとの関連を再確認することができた。

次に、“口”の場合について分析してみる。“口”の場合は、「深さ」や「幅」に関係なく用いられる。

（38）我们村子里有一口十米深的井。
［我々の村には 10 メートルの深さの井戸が一本ある］
（39）我们村子里有一口十米宽的井。
［我々の村には 10 メートルの幅の井戸が一本ある］

これは、何杰 2001 がいうように、〈口状のモノ〉と捉えることもできるが、「井戸」は「水をくみ上げる」ことにより、井戸の地面に出ている部分が「水」が出入りする顕著な部分であるということができる。そのため、【容器】としてみることができる。このように考えると、「井戸」の〈深さ〉や〈幅〉に関係なく用いられていると解釈することができる。

“眼”の場合も「外部世界の情報を取り込む器官」として【容器】と捉えることができる。しかし、“眼”の【容器】のスキーマと、“口”の【容器】のスキーマを比較してみると、「目」に入るのは主に抽象的な情報であり、この情報の出入りは、主体にとって、ほぼ無意識的な「見る」という行為に伴っているコトガラである。しかし、“口”の場合は、「摂食」または「言語行動」という主体の意識的な行為であり、また、飲食物のように視覚や触覚で捉えられる具象物であるため、“口”の場合は【容器】のスキーマかつ【移動】の概念に基づいており、“眼”は〈形状〉に基づいていると説明できる。

以上の分析より、“一口井”と“一眼井”の着眼点の違いが明らかになった。

Ⅵ.おわりに

本稿では、現代中国語における身体部位名詞である“口”、“嘴”の意味拡張について、認知言語学の視点から「メタファー」、「メトニミー」などの概念を用いて考察を行い、その認知メカニズムについて分析を行った。

身体部位名詞である“口”、“嘴”は、基本義からメトニミー的拡張、メタファー的拡張においては【容器】のイメージスキーマに基づいた〈開閉〉、〈摂食行動〉、〈言語行動〉、〈言語表現〉、〈物体部分〉といった意味拡張が行われている場合について考察を行った。

また、“口”が名量詞、動量詞として用いられる場合においてもこれらの意味拡張が関連しており、名量詞として用いられる場合においては、同様の名詞に対して用いられる他の身体部位名詞である「頭」を表す“头”と「目」を表す“眼”との着眼点との違いについても言及した。

注

1．本稿は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を行ったものである。具体的には、例文を「北京語言大学中国語コーパス」: 北京语言大学汉语语料库（BCC）（http://bcc.blcu.edu.cn/）およびインターネットで検索したものに変更し、新たに考察を行った。

2．この定義は、佐藤 1978(＝1992『レトリック感覚』講談社学術文庫)の考え方に基づき、まとめたものである。

3．【 】は概念を表し、〈 〉は意味を表す。以下これに従う。

4．“口”と“嘴”は、表す意味範疇が異なっており、“嘴”は単独で具象物としての身体部位である「口」を表すことができるが、“口”は“目”と同様に、単独で身体部位である「口」を表すことはできない。

5．本稿では挙げた例文については、「北京語言大学中国語コーパス」: 北京语言大学汉语语料库（BCC）（http://bcc.blcu.edu.cn/）で検索し、それ以外のものには URL を付している。例文の日本語訳は筆者による。

6．例文（2）の中には“伤口”（傷口）、“一口一口”（一口ずつ）と言った“口”を用いた表現が使用されているが、本章では身体部位の〈口〉として用いられている基本義としての“口”を考察の対象としているため、ここでは扱わない。“一口一口”については、Ⅳ章 1 節を、“伤口”については、5 節を参照のこと。

7．《现代汉语辞典》（第 7 版）参照。

8．“嘴”は具象物である〈口〉を表すが、〈歯〉の意味は表さないため、本節では“口”のみを分析の対象とする。

9．2022 年 12 月 19 日閲覧。

10．“猪”は“头”を用いて数える場合もある。このときの着眼点の違いについてはⅤ章 1 節を参照のこと。

11．以下の引用における「……（中略）」は筆者による。

12．山梨 2000：152 参照。

13．辻幸夫編 2002：42 によると、「〈起点・経路・着点〉スキーマは，経験的な空間認知を反映させたもので，典型的には《移動》の現象を表す」とある。

14．“嘴”が名量詞として用いられる場合として、“一嘴饭”、“一嘴瞎话”等が挙げられるが、これは、数詞が“一”に限られるため、张丽群 2000 が述べている“一＋身体部位名詞”に含まれるといえる。よって考察の対象としないことにする。

15．このとき、“嘴”は量詞として用いられない。量詞として用いられる場合にも、“口”と“嘴”は異なる拡張を呈していることがわかる。

16．松本 2000 では、日本語における「口」の拡張において、位置・形状・機能の 3 つの類似性を挙げており、これらにあてはまる「口」の意味は、身体部位である「口」との類似性

が最も高いと指摘している。
17.「豚」の場合でも、「子豚」というときに、インフォーマントによっては“?三头小猪”という表現を許容できない人もいる。
18.“自由义”は何杰 2001 の術語である。“它对数词没有限制，可以和数词自由结合。”[（自由義は）数詞に対して制限はなく、数詞と自由に結合することができる]と述べている（何杰 2001：257）。

参考文献

1）日下部直美：试论现代汉语中有关“身体部位名词”的语义扩展问题．名古屋大学大学院国际言语文化研究科硕士学位论文，2003
2）日下部直美：试论“头”的基本义和语义扩展．多元文化．名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻，5:201-211, 2005
3）日下部直美：“手”の基本義とその意味拡張．研究紀要．星城大学，20:35-40, 2020
4）日下部直美：“足”、“脚”、“腿”の基本義とその意味拡張．研究紀要．星城大学，21:35-40, 2021
5）日下部直美：“眼”、“眼睛”、“目”の基本義とその意味拡張．研究紀要．星城大学，22:37-49, 2022
6）中国社会科学院语言研究所词典编辑室编：现代汉语词典(第 7 版)，商务印书馆，北京，2016
7）山梨正明：認知言語学原理．くろしお出版，東京，2000
8）辻幸夫編：認知言語学キーワード事典．研究社，東京，2002
9）张丽群：试论身体部位名词作量词使用时的特征．中国語学，日本中国語学会，248:199-212，2000
10）田中聰子：「口」の慣用表現―メタファーとメトニミーの相互作用―．言葉と文化．名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻，3:5-20, 2002
11）松本曜：日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張―その性質と制約．坂原茂編，認知言語学の発展，ひつじ書房，東京，2000
12）何杰：现代汉语量词研究(修订版)．民族出版社，北京，2001

例文検索

「北京語言大学中国語コーパス」：北京语言大学汉语语料库（BCC）（http://bcc.blcu.edu.cn/）